



神辺中だより

5

令和7年9月
神辺中学校長

2学期スタート！

37日間あった夏休みが終わり、8月25日(月)、2学期がスタートしました。猛暑が続き、新型コロナウイルスが再び流行している大変な時期ですが、元気にこの2学期を過ごしてほしいと思います。



【始業式 校長あいさつ】

みなさん、夏休みはどうでしたか。充実した時間を過ごせましたか。今日から2学期が始まります。気持ちを新たに、また一緒に歩いていきましょう。

今日は、「80年」という数字をキーワードに話をしたいと思います。みなさんは「80年」という時間を想像したことはありますか？今年には戦後80年という節目の年です。1945年の夏、日本は戦争を終え、町は焼け野原、学校の校舎も不足し、勉強する場所や道具も十分ではありませんでした。けれども、当時の中学生たちは「平和な未来をつくろう」と強い気持ちで学び続けたそうです。平和な社会を築くために新たな歩みを始めた年でもあったのです。その努力の積み重ねが、今の私たちの安全で便利な社会をつくっています。80年という年月は、私たちの日常がどれだけ多くの人の努力や願いの上に成り立っているかを改めて考えるきっかけになります。

では、逆に80年後、2105年はどうでしょうか。みなさんはその時、90歳を超えています。きっと社会は大きく変わっているでしょう。AIやロボット、宇宙開発がさらに進み、人類の生活は今とは想像できない姿になっているかもしれません。しかし、その未来を形づくるのは、まさに今学んでいるみなさんの考え方や行動です。歴史を学び、未来を想像し、「自分は何ができるのか」を考えて行動すること。それがこれからの社会を作っていく上での大切な姿勢だと思います。

2学期は文化部作品展示や体育大会、新人総体など、多くの行事があります。友達と協力し、意見を出し合い、時にはぶつかりながらも、より良い形を話し合いで目指す経験、この経験が平和な社会づくりの基礎となります。互いの違いを認め合い、力を合わせる姿勢を大切にしてください。

戦後80年の今、私たちはこれからの80年をどう生きるかを考える責任があります。皆さんは明日を迎えることができますか。おそらく明日を迎えることができます。しかし、80年前の8月6日に同じように明日を迎えられるはずだった多くの人が翌8月7日を生き延びて迎えることができませんでした。皆さんが当たり前のように明日を迎えられるのは今が平和だからこそです。この平和な社会を守るために自分たちにできることは何か、想像してみてください。きっと皆さん一人ひとりの小さな努力や優しさが、未来の平和な社会をつくるのではないのでしょうか。この2学期も、自分の成長と周囲への思いやりの両方を大事にしながら過ごしてください。それでは、今日からの学校生活を元気にスタートしましょう。

【生徒指導主事 島谷先生より】

始業式の日、島谷先生から、2学期特に意識して生活してほしいことが伝えられました。心落ち着いた環境で生活することは、学習意欲の向上やクラスの仲間のことを思いやることにもつながります。意識して生活しましょう。

2学期重点目標について

「場を清める」～学習環境を整える～



場を清めることは、丁寧に清掃することだけではなく、その場に合った行動や雰囲気(環境)づくりができることを念頭に置いて

- ①登校かばんはロッカーの上に置き、ロッカー内の荷物を整理整頓する。
- ②空き教室の机上整理、椅子の整頓を行う。
- ③服装を整える。(ワイシャツはズボン、スカートに入れる)



『人の意欲の扉は内側からしか開かない』

先月、広島国際会議場で杉並区立済美養護学校主任教諭 川上康則さんのご講演を聞く機会がありました。公認心理士・臨床発達



心理士の資格を持つ川上さんから、私たち教職員は子どもたちにどう向き合い、支えていけばよいか、いろいろな角度からご示唆をいただきました。子育てにも通じるところがあると思うので、いくつか紹介します。

『人の意欲の扉は内側からしか開かない』

人が主体的な行動を起こすには、安全基地の役割を果たせる大人が必要です。困ったときにその大人を見ると安心する、という関係性の中で、子どもは不快感(不安・心配・怒り・悲しみ等)を安全に抱える力を獲得していきます。「大丈夫だよ、一つ一つ乗り越えていこう。」と歩調を合わせて前に進む関わりを子どもたちは求めています。子どもたちにとって一番のご褒美は、笑顔と機嫌の良さをキープできる大人がいつもそこにいることです。そうすることで、大人の顔色をうかがわなくて済み、今のままのあなたで大丈夫と肯定されている気持ちになれ、その場を気持ちよく過ごせるようになります。自分が認め、自分のことを分かってくれる大人とのラポール(信頼関係)を構築する中で、心の扉は開かれます。

『熱心な無理解者にならない』

子どもについて「無理解・誤解・理解不足」などの状況にもかかわらず、熱心と言われるくらい「直そう、正そう、変えよう」と積極的な指導・支援を繰り返し、かえって当事者の状態を悪化させてしまうことを「熱心な無理解者」と児童精神科医の故・佐々木正美先生が提唱されました。「ないものねだり」より「あるもの探し」が大切です。マイナス思考の指導者は、「理想の子ども像」-「実際の子ども像」で子どもを捉え、直したいところ(トゲ)を取るという思考にりがちです。プラス思考の指導者は、「実際の子ども像」+「新たな発見」で捉え、新しく発見したプラス面で余白・伸びしろを埋めながら育てるという発想に立ちます。プラス思考を持つには、気持ちに余白をもっておくことが大切です。また、「こうあるべきの呪縛」から抜け出すために、「とらわれない、とらわれない」とつぶやいて自分に言い聞かせるとよいです。